

《forum in FORUM》

ドイツで見たこと聞いたこと

What I saw and listened to in Germany

工学部 機能材料工学科 照 沼 大 陽

Department of Functional Materials Science and Engineering, Faculty of Engineering

Masahiro Terunuma

1991年6月から9カ月間文部省在外研究員としてドイツのKarlsruheの大学に滞在させていただいた。その間目にしたこと気のついたこと等を思い付くままに書いてみた。

ガソリンで時間は買えるか？

よく知られているようにドイツのアウトバーンは速度無制限である。一般道の制限速度は100km/h。資源の節約、環境保護をかかげて廃品回収に熱心なドイツ人に似合わない高速でのドライブと今しばらくの有鉛ガソリンの使用猶予は早期に高度な車社会を実現したドイツ故抱える大きな問題点なのかも知れない。

アウトバーンの高速レーンではポルシェ、ベンツあるいはBMWなどが時速200km/h以上の速度で走っていることも多い。100kmの距離を200km/hで走れば30分で目的地に着くことができる。100km/hで走った場合に比べて30分の時間を節約できることは確か。彼らはあたかもガソリンで時間を買おうとするかのように高速でドライブしている。

EC統合

フランスのポンピドー美術館の右側に西暦2000年までを秒単位でカウントダウンしている液晶表示板がある。西暦2000年、EC統合を発足させる目標の年である。もし統合が成功すれば国境を越えるたびに通貨の変更をする必要がなくなる。このことだけでもヨーロッパの経済活性化におおいに寄与すると思われる。

しかし、実際にはヨーロッパ内の“南北問題”、



大学に隣接するKarlsruhe城

先導国間の思惑の違いなど多くの難問を抱えている。今年5月、デンマークで国民投票によりEC統合に不参加が決定されたが、これも統合がけっしていいことづくめというわけではなく多くの難問を抱えていることのひとつの現われであろう。この構想を強く推進しているのはフランス、イギリス、およびドイツであるが、EC内でもっとも経済力のあるドイツの場合には統一に参加することはすでに決定しているものの、現在でもいくつかの意見があるようだった。例えば統合ECの公式言語が英語、フランス語（およびもうひとつ？）でドイツ語は準公式言語扱いであることに強い不満を漏らす人もいた。

いずれにしても、この統合問題はECだけにとどまらず世界中に強い影響を与えることは明らかである。

大学で

Karlsruhe大学はドイツの工科大学の中で



周波数の単位として名が残るH.Hertzの胸像

もっとも古く、周波数の単位で名の残るHertzあるいはアンモニア合成のHarberが在籍した大学として知られている。

エリートを養成することが主目的であったドイツの大学も大衆化しつつあるという。私が滞在していたKarlsruhe大学の化学系には入学定員はなく、今年は4、5年前の2倍近い入学生(約250名)であったという。教育すべてに授業料というものが存在しないこの国では進学率が増加することは必然と日本人の私には思えたが、彼らにとっては必ずしもそうでない時間が長く続いたらしく、教授のなかからは学生のレベル低下を心配する声も聞かれた。

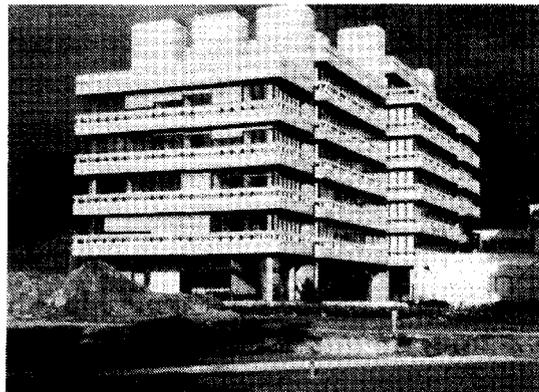
Karlsruhe大学の化学系では無機化学(私は無機化学のTacke教授の研究室にお世話になった)に60MHz、250MHzおよび300MHzの3台、有機化学に(たぶん60MHzと)250MHzおよび400MHzのNMR装置(もちろんすべてBruker製)が設置され60MHzを除くそれぞれの機種にオペレーターがついていて快適な環境であった。また、X線構造解析の専門家がいるせいもありX線構造解析装置が4台も稼働しているとのことであった。

ヨーロッパの労働者、特にドイツの労働者は日本にくらべて働く時間が少ない。大学でも5時頃にはほとんどの人が帰宅していた。また大学内の行事もきわめて少なく、入学試験、入学式あるいは卒業式などのセレモニーはまったくなく、年4

回行なわれる博士課程の審査とそれにつづく学位取得者主催のパーティーが唯一行事らしい行事であった。毎年数多くの入学試験の準備、実施に多大の労力を割かなければならない日本の大学教官から見るとうらやましい限りである。

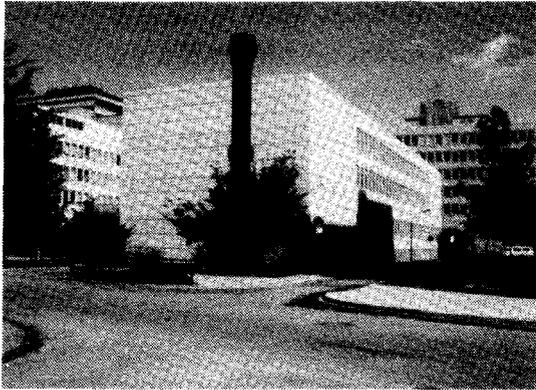
最新の分析装置あるいは通常の実験器具についてはさほど驚くこともなかったが、大学の建物、研究の遂行を支援するシステムの充実ぶりは日本のそれらとは比べものにならないレベルでさすがドイツという感じであった。授業料なしであれだけの設備、環境を維持するのに政府は予算をどのくらいかけているのか興味のあるところである。

ドイツの大学では、偉大な伝統をもちたいへんに恵まれた環境のなかで、その評価は分かれるにしても、ゆったりとたゆまず基礎的な研究を進めているという印象を強く受けた。



Harber法に使われた反応管

ドイツの学制は少々複雑だが大学進学コースは6歳からグランドシューレ4年(10才で大半の人は大学進学コースとその他に別れてしまう!)、ギムナジウム9年を修了後1.5年ほどの兵役を経て大学に入学する。大学の修了年限も大学によって異なるそうでKarlsruhe大学の場合には5年ないし6年かかるとのことであったが、その後直接ドクターコースに入ることから考えて日本のマスターコース修了と同じレベルと考えられる。ちなみに化学系の博士課程進学率はきわめて高く、95%を越えるとのことであった。ドクターコースに入ると給与(?)がもらえ(約16万円、しかし



Karlsruhe大学無機化学棟

ここから25%の税金をとられる) 彼らの意識はStudentではなくWorkerである。そのため化学系企業への就職者の平均年齢が高すぎるという企業側の意見も聞かれた。もっとも、化学系企業の場合大卒者はほとんど採用しないこと、さらにドクターの給与が高い(年収約650万円からスタートする。ただしこの額にはすでに最高税率55%程がかかる)などの状況が化学系のドクター進学率を高めているとのことであった。教授の給与が気になるところで、Tacke教授ははっきりとは答えてくれなかったが、かなりの高給を得ていることを匂わせていた。

カリキュラム上で目に付いたのは実験の時間がきわめて多いことで、恵まれた設備およびスタッフによるところが多いと考えられる。

ドイツ人は足が長い?

その1. 私の身長は175cm。私の年代としては比較的背が高いほうと考えてよいかも知れない。ドイツ人も若い人を除けば私と同程度あるいはより低い身長の人も多い。しかし、私にとってトイレの便器が高く不便なことがたびたびあった。結論としてドイツ人は足が長いのだと考えた。

その2. ある秋の日には研究室全員で黒い森にハイキングにいった。帰ってきて今日はどのくらい歩いたのだろうかという話になった。彼らは3時間ほど歩いたので15kmだという。なに! 3時間なら12kmでは? 聞いてみるとドイツでは1時間5kmで計算するという。彼らはそれほど足早で

歩いていようにも見えない。やはり足が長いのだ。

ドイツの犬は幸せか?

ドイツ人はとても犬が好きである。レストラン、市電、車の中どこにでもつれて行く。犬はよくしつけられていて、見知らぬ人、あるいは他の犬に対してもまず吠えることはない。すべての犬があまりにもよくしつけられていて当の犬が犬であることを忘れさせられているのではないかなどと錯覚してしまいそうである。獣としての犬たちが唯一持っている権利はどこにでも排拙してよい自由だけ、と考えるのは犬に失礼だろうか。

ドイツは平らな国?

滞在中初対面の人に“この国の印象は?と質問されたときは“日本に比べると平坦な国と感じます。”と答えていた。そうすると質問した人は決まって“ドイツにも山がある。平坦な国ではない。”と憤慨した調子で言う。しかし、日本人の私から見るとドイツの国土の大部分はむしろ広陵地帯と言ったほうがよい。事実、鉄道またはアウトバーンを利用してもトンネルというものをめったに通過することはない。もちろん、小高い部分を避けて作っているわけだが、日本ではそういう風にしてもトンネルなしには通過できない山岳地帯がたくさん存在するのだから。平坦で、国土の広さは日本の2倍近く、そして人口は約半分、さほど深刻な住宅問題など起こるはずがない。

また、日本の場合、頻繁に襲撃する台風、地震により失った累積財産は莫大な額にのぼると考えられるが、ドイツにはそれら災害もなく、加えてほとんどの建築物が石材を利用して作られていることもあり、両国の財産の歴史的累積差は想像を越える額になると思われる。ドイツはその意味でも日本より数倍豊かな国になる必然性があるように思える。

ドイツの床屋さん

ヨーロッパ人の髪の毛はきわめて細かく柔らかいが東洋人のそれは太く硬い、そのため床屋さん

が東洋人の散髪を嫌がると聞いたことがある。しかし幸い私が行った店の3人の店員さんは、英語を話すのは1人だけであったが、大変に親切で問題なく過ごすことができた。散髪料金は33DM（昨年暮れにまでは30DM）、日本円で2600円ほどである。若干安いように見えるが、ドイツの床屋さんは日本と違って頼まなければ髭そりをしないのでほとんど同じ値段ではないだろうか。

先のオリンピックでスキンヘッドの選手を多く見かけたが、西洋人の方が容易に髪の毛を剃ることができるのだろうなどと思いながら見ていた。

ドイツのテレビ文化

ある日、“今朝テレビのニュースで見たけど”と友人に話しかけたら“日本人は朝からテレビを見るのか？”と逆に質問されてしまった。多くの日本人は朝食時にテレビをかけていると思われるが、ドイツ人はどうでもそうではないらしい。ドイツのテレビ番組にはいわゆるワイドショーやジャリタレによるものはほとんど見られない。圧倒的に多いのは映画番組（それも大変に古いアメリカ映画たとえばジョンウェイン主演の西武劇、奥様は魔女、ローハイド、名犬ラッシーなどからターミネーターその他最新のもの、日本映画ではトラトラトラ、マルサの女、将軍などを見た）、その他はニュース、クイズ、それと伝統的なドイツ民謡、さらに夜間には討論番組などであろうか。朝のニュース番組は20分程のサイクルで同じ内容の画面を流していた。どうもドイツ人はあまりテレビが好きでないらしい。あまりテレビを見る人が居ないためスポンサーもつかず独自に作製した番組数もすくないのではないだろうか。コマーシャルが少なく映画などがこまぎれにならない、スポーツ番組の途中での終了などが無い（乗馬、テニスなどは試合終了まで何時間も放送していた）などのメリットもあったのだが。

一方、日本の現代文化（？）はテレビによって支えられているようにも見受けられる。めまぐるしく変わる美しいコマーシャル画面、おじさんには理解できない言葉、音楽の氾濫、おせっかいなレ

ポーターのばか騒ぎ。

日本のテレビの出演者の平均年齢とドイツのそれは大きく違うのではないだろうか。外国人から見た日本は京都に代表される歴史的文化とハイテクが混在するミステリアスなものであるそうだが、私には現代日本の“文化”はテレビによって生み出される“ジャリの文化”に見えてしかたがない。

東西ドイツ統一その後

Karsruheはフランス国境近くにあり旧東ドイツとは反対側に位置するため統一の影響を肌身を感じるというわけではなかった。しかし統一直後はかなりの影響があったらしく、たとえば中古車市場が混乱し急激な値上がりが見られたそうである。旧東ドイツの工場はいずれも旧式であるためほとんどが閉鎖され、失業者が大きな問題となっていることは日本でもたびたび報道されているとうりである。また、東側の国々の企業（？）は西側の特許権に縛られないとして生産をつづけてきたが、東ドイツが西側に組み込まれた途端特許権の問題がおきて、生産がつづけられず閉鎖された例もあったそうである。さらに、旧東ドイツ領内には旧ソ連軍の兵士が2万人以上残っており、その帰国を促進するためドイツが資金をだして旧ソ連領内に家を建設中とのことだった。

旧東ドイツ領内には一度だけ（ベルリン、ポツダムとワイマール）行っただけなのであまり的確なことは言えないが、道路の状態、歴史的文化遺産の保存状態などを見た限り問題はかなり深刻であるように見受けられた。旧東ドイツ第2（ないし3番目？）の都市にあるドレスデン大学の学生（ドクターコース）と話す機会があったが、その大学には60MHzNMR一台が設置されているのみでそれも自由に利用できるわけではないため、2、3カ月に一度、60本以上のサンプルを抱えて500Km以上の距離を車で走りKarlsruhe大学まで60MHzNMRを測定に来ているとのことであった。この事実だけでも旧東ドイツの窮状が目に見えるようであった。

ドイツ人はローソクが大好き！

ドイツ人の家庭に何度か招待していただいたが、食事のときは必ず電気を消してローソクを立てそのほのかな明かりの中でおしゃべりをするのが常であった。いまの日本では停電のときぐらいしかローソクを見かけないので、なんとなく奇妙な感じがしたものだ。レストランも外から見ると薄暗くテーブルには必ずローソクが備えてある。おまけに入り口近くのカウンターでは一見怖そうな顔をした髭面のおじさんたちがビールなどを飲んでいるし、メニューを見ても何が出てくるかわからないしなどが重なりレストランに入るとを躊躇したことがたびたびあった。

友人になんでローソクをつけるんだと聞いたところ、暗いところは落ち着くしローソクの匂いがいい、とのことだった。これが日本人の答えだったら“なんとなく危ない人だ”と思われるな、などとひそかに思ったりもした。

日本の夏、ドイツの夏

Karlsruheは北海道の札幌とほぼ同じ緯度にあるため比較的涼しい、なにより乾燥しているのが一番である。送ってもらったおせんべいを開封しておいても湿気ることは無かった。海苔でくるんだおせんべいは彼らにはあまり好評ではなかったが。

蛇、蚊、蟬、トンボその他昆虫などはとても少ない。夏の夜、庭でローソクの明かりのもとで食事をしても虫にじゃまされることもなかった。

ドイツの木々は薄い緑に見えた。日本の木々は緑濃く、うっそうとしている。日差しの強さと共に日本（関東）が熱帯により近いことを実感させる。こういう自然環境のもとで彼の地で青い目、金髪（細いそして薄い髪の毛）が実現されたのだろう。ドイツではヘアートニックを見つけることができなかった。

“Also Tschus”

これはドイツでもっとも頻繁に耳にした言葉である。彼らはいいさつがたいへんに好き(?)である。私のドイツ人に対するイメージに相違しておしゃべりな人が多かった（アメリカ人程ではないが）。隣の実験室からちょっと話しに来て、道でたまたま出会うとも“Tag”、別れるときには“Also Tschus! (アルゾーチュス!)”である。状況で変化するのだろうか日本語でいえば“じゃ、また”ぐらいに相当するのだろうか。とても気軽に気持ちのいい言葉の響きであった。

最後に、お世話になった皆さんに感謝の気持ちをこめて“Also Tschus!”

I had been in Karlsruhe University for 9 months last year. I am going to write something I saw and felt in a daily life in Germany. As a matter of course, there are a lot of differences between Germany and Japanese in thier thinking ways. It was so interesiting and exciting experiences for me to touch them directly.